

るせいか、使用される事も非常に少ないが、佐川町方言では「はぐ」の使用範囲が広く、共通語で「はぐ」を使用する部分は勿論、「はがす」の占めている部分の一部にも「はぐ」が使用される。そのため、佐川町方言では共通語と比較して、「はがす」の占める部分が狭い。

(3)「はがす」の意味については、ほぼ差がない。

5. おわりに

今回、私の使用言語内の「はぐ・はがす」と共通語の「はぐ・はがす・むく」の比較考察を試みたのだが、これらの語に関連して、「とる」「のける」などをも今後考察してみたいと考えている。

注(1) この場合のカラは起点格のカラをさす。

りんごの皮を 端から 5cmはぐ。

バナナの皮を 端から 10cmむく。

というような場合のカラはとるが、これらは“順序助詞”とみる。なお“順序助詞”については、

詳しくは、奥津1967を参照されたい。

注(2) 佐川町の老年層の話者(男性1916生)によると、(1)~(28)の文はすべて「はぐ」のみの使用となり、「はぐ・はがす」が両用できるのは(29)~(32)となった。また「はがす」は昔はなかったことば」という内省があった。このことや、私の場合も共通語と比較して「はがす」の使用が少ないことを考えあわせると古くは、佐川町方言では共通語の「はぐ・はがす・むく」で担われていた部分に、すべて「はぐ」が使われていたのではないかと考えられる。そこへ、共通語の影響をうけて、私のように若年層では「はがす」という語をうけ入れてきているのではないだろうか。しかし、「むく」ははまだ使用語の地位を与えられてはいないという現状なのであろう。

言語経歴：1954.5~1977.3高知県高岡郡佐川町 1977.4~横浜市港北区在住

ずらす・どける・のける

加藤久雄

1. はじめに

「ずらす」「どける」「のける」の三つの動詞は、次の(1)から(3)の文脈では類似した意味を表わす。

(1) タイプライターを置くために 机の上の本を 隅へ ずらした。

(2) タイプライターを置くために 机の上の本を 隅へ どけた。

(3) タイプライターを置くために 机の上の本を 隅へ のけた。

このことから、「ずらす」「どける」「のける」には、意味的に何らかの共通性があることが確認される。また、「どける」と「のける」の共通性については、次のようなことから確認することができる。例えば、

(4) タイプライターを置くために 机の上の本を 隅へ 退けた。

と漢字による表記がなされていた場合、「退けた」が有する三つの読みのうち、「しりぞけた」の読みは、とられないが、「のける」と読むか、「どける」と読むかは、(4)のような文脈では、判断がつかない。したがって、「のける」と「どける」は、ある文脈ではかなりの意

味の類似性があるといえる。

それでは、「ずらす」「どける」「のける」は、まったく同義であるかという点、例えば

(5) 警官は 事故車のまわりに集まった野次馬を どけた／のけた。

は、文法的な文であるが、

(6)× 警官は 事故車のまわりに集まった野次馬を ずらした。

とは言えない。また、「どける」と「のける」については、(4)でみたように、かなり類似性が高いと予測されるが、

(7) 雀の子 そこのけ そこのけ お馬が 通るの小林一茶の句を

(8) 雀の子 そこのけ そこのけ お馬が 通るとしては、語調が強く、どうも落ち着きが悪いなど、「ずらす」「どける」「のける」の三つの動詞が、まったく同義であるとは言えない。

そこで、これらの三つの動詞の用法を例文を通して比較することによって、この三つの動詞間に見出される示差的特徴を明確にし、その示差的特徴から導き出

される意味特徴の束として、それぞれの動詞の意義素の記述を試みてみたい。なお、一般に、意味特徴は、意味論的特徴 (semantic feature), 統語論的特徴 (syntactic feature), 含蓄的特徴に下位分類されるが、本稿もその立場にたつ一稿では、そのうち、意味論的特徴と、統語論的特徴の分析を中心に行なう。そして、その両者の特徴間には、どのような関連性があるかを、みていくことにする。

2. 分析

「ずらす」「どける」「のける」の意味の類似性は、(1)(2)(3)でみたとおりである。それを、これらの三つの動詞の共通点としてまとめると次のようになる。

- (9) ① ある動作主が
 ② ある対象を
 ③ ある始発点から
 ④ ある到達点へ
 ⑤ 移動させる

つまり①から④は、いわゆる格 (case) であり、「ずらす」「どける」「のける」の三つの動詞は、いずれも①から④の格を支配するという同一の格支配構造を構成する動詞である。⑤は、動詞としての「動作・作用の属性」⁽¹²⁾を示すものである。①から⑤までの関係を、格文法になら⁽¹³⁾い示せば、(10)になる。

(10) $S \rightarrow C_1 + C_2 + \dots + C_n + V$

(S: 文, C: 格, V: 動詞)

上式では、格の数は C_n までと任意の数で表わしてあるが、(9)において、格は①の動作主格 (Agentive, 略してA), ②の対象格 (Objective, 略してO), ③の源泉格 (Start, 略してS) ④の目標格 (Goal, 略してG) の四つで、 C_4 である。しかし、「ずらす」「どける」「のける」は、以上の四つの格のほか、

- (11) [きのう]_r [研究室で]_L
 [太郎は]_A [机の上の本を]_O
 [花子と]_C [両手で]_I
 [ずらした/どけた/のけた。]_V

のように、時間格 (Time, 略してT), 場所格 (Locative, 略してL), 共同格 (Comitative, 略してC), 手段格 (Instrumental, 略してI) などととることができるので、 C_n と表わしたわけである。

そこで、分析の手順としては、(10)の $S \rightarrow C_1 + C_2 + \dots + C_n + V$ の式に従って、「ずらす」「どける」「のける」の三つの動詞の支配する格に視点をあて、意味特徴の三つの下位特徴のうち、最も特徴としての安定度

の高い、統語論的特徴を明らかにし、次に、意味論的特徴を、明らかにする。そして、その両者の特徴の関係についてみていくことにする。

2.1. 動作主格について

「ずらす」「どける」「のける」の三つの動詞の動作主格は、いずれも有生性 [+animate] の名詞でなければならない。

- (12) 太郎が 机を ずらした。
 (13) 太郎が 机を どけた。
 (14) 太郎が 机を のけた。

ある文脈では、「犬」や「猫」などの動物も動作主となり得るから、動作主が、特に人間性 [+human] でなければならないことはない。しかし、三つの動詞とも、(15)のように、無生性 [-animate] の名詞は動作主としない。

(15) ×鉛筆が 机を ずらした/どけた/のけた。

このように、動作主については、「ずらす」「どける」「のける」の間に、示差的特徴を見出すことはできない。なお、無生性⁽¹⁴⁾の名詞が、表層格カ格の名詞句を構成する次のような用法がある。

(16) 強風が 看板を ずらした。

(17) レッカー車が 事故車を どけた/のけた。

しかし、これらのカ格は、いずれも手段格で動作者ではないので、動作主に関する [+animate] の制約を設定する反証にはならない。

2.2. 対象格について

対象格は、表層格ヲ格で表わされる。対象格にたつ名詞は、例文(1)から(3)が示すように、物を表わす名詞である—この名詞の特徴を [-animate] と表わす—。そして、種々の状況下においては、「本」だけでなく、「机」(例文(12)から(14))、「看板」(例文(16))、「事故車」(例文(17))など、様々な [-animate] の名詞が対象格にたつ。また、「どける」と「のける」は、(5)が示すように、人を表わす名詞も対象格にたつことができる。また、ある文脈では、「犬」や「猫」も対象格にたつことができるであろうから、「どける」と「のける」については、対象格に対する [-animate] の制約は働かないことになる。これに対して、「ずらす」にはその制約が働く。

このように、「どける」「のける」と「ずらす」との間には、対象格についてひとつの差異を見出すことができるのである。しかし、以上のような差異のもとに表わされた、三動詞の用法から抽象される意味論的特

徴は、いずれも、

(18)SF1 対象格にたつ名詞によって表わされる物・人・動物を空間的に移動させる
であり、対象格に見出された差異は、何ら関与性をもたない。そこで、三動詞に共通な意味論的特徴に対応する統語論的特徴として、対象格に対する制約を設定し、先の「机」、「看板」などの[-animate]の特徴と、「人」や「犬」などの[+animate]の特徴の上位特徴として、実質性[+MONO]の特徴をたてれば、意味論的特徴と統語論的特徴に対応関係を保つことができる。つまり、[+MONO]である時、(18)の特徴を有するという関係である—また、以下の議論でも、[+MONO]の特徴の設定は、意味記述にとって有効的である場合がある—。

ところで、
同じように、[+MONO]の名詞を対象格にとった用法に次のような用法がある。

(19)×太郎を ずらせば クラスの全員が 合格点です。

(20)×太郎を どければ クラスの全員が 合格点です。

(21) 太郎を のければ クラスの全員が 合格点です。

(21)の意味は、(18)では説明が付かない。したがって、「のける」には、(18)のほかにも、

(22)SF2 対象格にたつ名詞によって表わされるものを、論理的にある範囲に入れない

ということを表わす用法があるとしなければならない。この(22)の意味論的特徴の有無は、「ずらす・どける」と「のける」の間に見出される示差的特徴のひとつである。

以上は、対象格にたつ名詞が、[+MONO]の場合であったが、これに対して事柄を表わす[+KOTO]の素性を有する名詞の場合はどうであろうか。

(23)×北向きであることを ずらせば快適な部屋です。

(24)×北向きであることを どければ快適な部屋です。

(25) 北向きであることを のければ快適な部屋です。

(23)から(25)で、対象格に[+KOTO]の名詞をたてることのできるのは、「のける」のみであり、また、その意味論的特徴は、先の(22)である。以上の対象格に関する分析は、統語論的特徴と意味論的特徴の関係として、(26)のようにまとめることができる。

(26) a ずらす・どける [+([+MONO])_o__], [-([+KOTO])_o__] の統語論的特徴を有し、[+([+MONO])_o__] の時、意味論的特徴SF1が顕在化

する

b のける [+([+MONO])_o__],[+([+KOTO])_o__] の統語論的特徴を有し、[+([+MONO])_o__]の時、意味論的特徴SF1あるいはSF2のどちらかが顕在化し、[+([+KOTO])_o__]の時、意味論的特徴SF2が顕在化する。

ここに、統語論的特徴と意味論的特徴との対応関係を見出すことができるが、(19)(20)(21)の対象格の名詞「太郎」は、「太郎が合格点でないコト」を深層構造に持つと考えると、

[+([+MONO])_o__]であれば、SF1、[+([+KOTO])_o__]であれば、SF2と、両者は相補分布をなすことになり、(26)の記述は、(27)のようによりシンプルに定式化することができる。

(27) a ずらす、どける・[+([+MONO])_o__], SF1

b のける・[+([+MONO])_o__], SF1
・[+([+KOTO])_o__], SF2

しかし、(21)の「太郎」は、やはり[+MONO]であろうし、そうすると、同一の節点(node)に支配される名詞句が、深層構造—(21)の場合は、「太郎が合格点でないコト」—では、[+KOTO]の表示が与えられ、表層構造—(21)の場合は、「太郎」—では、[+MONO]の表示が与えられるという不合理な結果を生んでしまう。確かに、(27)の定式化は、(26)に比べればよりシンプルで理論的妥当性も高いであろうが、同一の名詞句に対する素性表示が、深層構造と表層構造とで、変化してしまうのは願けない。なるほど、深層構造である「太郎が合格点でないコト」の記号列は、変形操作により、表層構造「太郎」にまで、まさに変形されているが、素性表示まで変化させられてしまう理論的根拠は今のところ何も見あたらない。むしろ、(27)の解釈を捨て、多少複雑ではあるが(26)の解釈の方を妥当とすべきなのかもしれない。

(19)(20)(21)の「太郎」の深層構造は、「太郎が合格点でない」の文からの同一名詞連体修飾変形によって生成された「合格点でない太郎」とした方が、「太郎が合格点でないコト」と解釈するより妥当であるのかもしれない。この解釈に従えば、深層構造「合格点でない太郎」も表層構造「太郎」も、同じ[+MONO]であって、変形により素性表示が変化するという、難点は避けることができる。無論、この立場によれば、やや複雑な(26)の定式化に従わなければならない。

以上が、対象格に関する分析であるが、現在のところでは、(26)の記述に従っておく。

2.3. 源泉格と目標格、移動格について

「ずらす」「どける」「のける」は、いわゆる移動他動詞である。そのうち移動動詞としての側面は、その典型的な格である源泉格と目標格をとることから知ることができる。そして、源泉格は、カラ格・ヨリ格の表層格によって表わされ、目標格は、マデ格・ニ格・ヘ格の表層格によって表わされる。これらの特徴は、いずれも三動詞に共通なものであるが、源泉格・目標格の観点からは、これらの三動詞間にまったく示差的特徴がないわけではない。

- (28) a ×机の上から タイプライターを ずらす。
 b 机の上から タイプライターを どける／のける。
 (29) a 机の真中から タイプライターを 隅へ ずらす。
 b 机の真中から タイプライターを 隅へ どける／のける。

(28)と(29)の文法性の分布の違いはどこからくるものであろうか。結論を先に言えば、源泉格と目標格の関係のあり方の違いによるものである。(28)では、源泉格は「机の上」であり、目標格は、表層構造には現われていないが文意からして「机の上以外」である。「机の上」と「机の上以外」の関係は、同一平面上にないことである。それに対して(29)の源泉格と目標格は、同じ机の上であり同一平面上の関係にある。つまり、「ずらす」のとする源泉格と目標格は、必ず「同一平面上」になければならないのであり、「どける」「のける」には、その制限がない。この制限を、〔±同一平面〕の素性で示せば、以上のことは、(30)のように表わすことができる。

- (30) a ずらす 〔+同一平面〕
 b どける のける 〔-同一平面〕

(30) a, bの素性は統語論的特徴であるが、格と格との関係のあり方についての素性であり、このような素性は、今のところ一般性の高いものではない。しかし、この素性を移動動詞の素性としてはより一般的な〔±水平移動〕の素性に置き換えることはできない。たとえば、

- (31) 壁にはってあるポスターを 下から 上に ずらした。

の用法は、〔+同一平面〕であるが〔+水平移動〕ではなく、この両素性を置き換えることはできない。やはり、〔±同一平面〕の素性を、「ずらす」と「どける・のける」の示差的特徴として設定する必要がある。

さて、この(30) a, bの特徴は統語論的特徴であるが、これを意味論的特徴としてとり上げるならば、「ずら

す」は、

(32) SF3 そのまますべらすようにして 動かす
 という意味論的特徴を有しているといえよう。つまり、「ずらす」は〔+SF3〕、「どける」「のける」は〔-SF3〕となる。この〔±SF3〕と(30)であげた〔±同一平面〕の素性は、それぞれ前者は、意味論的特徴であり、後者は統語論的特徴であるが、このように、パラレルな関係にあることが明らかになった。

以上は、これら三つの移動他動詞の移動動詞としての側面であった。次に、他動詞としての側面についてであるが、それについては、前節の対象格に関する分析でみたとおりである。その対象格は表層格としてはヲ格の形式をとるが、ヲ格の形式をとる格には、対象格のほか、移動動作の行なわれる場所を表わす移動格(Movement, 略してM)がある。例えば、「橋を渡る」の「橋を」、「公園を通る」の「公園を」がそれぞれである。この移動格について、これらの三動詞を分析してみると、次のようになる。

- (33) (タイプライターを) 机の上を ずらしたら
 机に 傷が ついてしまった。

- (34) ×(タイプライターを) 机の上を どけた／のけたら
 机に 傷が ついてしまった。

つまり、「ずらす」は移動格をとることができるが、「どける」「のける」はそれをとることができない。この「ずらす」の特徴は、先の、〔+同一平面〕や〔+SF3〕の特徴と関連があるようにも思われるが、今は、(33)(34)の結果を(35)のようにまとめておく。

- (35) ずらす 〔+M__〕
 のける どける 〔-M__〕

3. まとめ

「ずらす」「どける」「のける」は、以上分析してきた、対象格、源泉格、目標格、移動格の他に、(11)で示したように、時間格、場所格、手段格をとるが、これらの格については、三動詞の間に、示差的特徴を見出すことはできない。したがって、これらの三動詞の意味記述は、以上の分析をもって(36)のように、結論づけられる。

- (36) ずらす 〔+(+MONO)_o__〕⇒ SF1
 〔-(+KOTO)_o__〕
 〔+同一平面〕⇒ SF3
 〔+M__〕
 どける 〔+(+MONO)_o__〕⇒ SF1
 〔-(+KOTO)_o__〕
 〔-同一平面〕

[-M_]

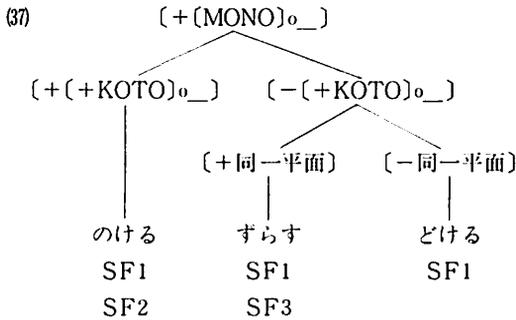
のける [+ [+MONO]o_] ⇒ { SF1

[+ [+KOTO]o_] ⇒ SF2

[-同一平面]

[-M_]

⇒の矢印が、統語論的特徴と意味論的特徴の関係を示している。また、示差性の観点からは、(37)のようになろう。



以上が、「ずらす」「どける」「のける」の意味分析である。この分析からは、まだ、三語の用法の差を説明できない部分もある。例えば、先に上げた(7)と(8)の差も、そのひとつである。しかし、それらの部分は、「1.はじめに」のおわりで述べた、三種の意味特徴の下

位特徴のうち、含蓄の特徴に属するものであると考えられる。そこで述べたように、本稿のねらいは、三種の下位特徴のうち安定度の高い統語論的特徴と意味論的特徴の両者の関係のあり方を分析しようとしたものであることを、ここでもう一度、おことわりしておく。

注(1) この分析に対して、(3)の方が、すわりが良いという情報を、ある話者（東京生まれ）から得た。ただし、その話者は、「のける」は、あまり使わないとのことであった。ついでながら、本稿の考察は、私の内省によるものである。

注(2) 「動作・作用の属性」の術語は、国立国語研究所1972による。

注(3) ここで、格文法というのは、C. J. Fillmore 1968をさしている。

注(4) 同一名詞連体修飾の定義は、奥津1974を参照されたい。

言語経歴：1954年5月名古屋市東区に生まれ、1977年3月まで名古屋。以後、横浜市港北区在住。

かえる・もどる・いぬ

酒井 恵美子

1. はじめに

国立国語研究所1964によれば、「かえる」「もどる」はともに「2.1527往復」に分類されている。しかし、「かえる」「もどる」は、往復運動の全過程をあらわしているのではなく、そうした運動の一部をあらわしているにすぎない。いくつかの辞書をたよりに、二語の共通の意味領域を考えれば、おおよそ次のようになる。〈ある場所からある場所へ、ある状態からある状態への今までとは逆方向の移動、変化〉、

私の生地徳島でも「かえる」「もどる」はほぼ同じような意味・用法をもっている。この二語は多くの文脈で互いに置換可能である。これに比べ「いぬ」は、人のある場所からある場所への今までとは逆方向の移動をあらわすだけで、意味・用法はより限定されている。

ここでは、私自身の内省により、「かえる・もどる・いぬ」の三語の意味特徴を分析し、のちに東京出身者との比較を試みたい。

2. 用法の概略

まず、簡単に意味・用法を分類しておいて、その各各を細かく検討することにする。

- (1) トランプが 裏にかえる。
- (2) ×トランプが 裏にもどる。
- (3) ×トランプが 裏にいぬ。
- (4) Iさんが 家にかえた。
- (5) Iさんが 家にもどった。
- (6) Iさんが 家にいんだ。
- (7) あて先不明で手紙が かえる。
- (8) あて先不明で手紙が もどる。
- (9) ×あて先不明で手紙が いぬ。

(1)～(9)の例文をみると、この三語のあらわしている動作により、二つのグループに分かれる。(1)～(3)では、180度回転することにより表裏が逆になっているのに対し、(4)～(9)ではそのような回転運動を必要としない、ただの平行的な移動である。言いかえれば、トランプ